

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	紙 田 路 子
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授）            桑 原 敏 典 副主査：（兵庫教育大学教授）    關 浩 和 委 員：（兵庫教育大学教授）    原 田 智 仁 委 員：（鳴門教育大学教授）    西 村 公 孝 委 員：（鳴門教育大学教授）    梅 津 正 美
3. 論文題目 自主的自立的価値観形成をめざす小学校社会科内容編成の研究	
4. 審査結果の要旨 教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 紙田路子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。 論文審査日時：平成27年2月3日（火） 18時40分～19時30分 場所：兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所大阪サテライト4階 402号室  (1) 学位論文の構成と概要 学位論文は、以下のように9章から構成されている。 序 章 本研究の意義と方法 第1節 研究主題 第2節 本研究の意義と特質 第3節 研究方法と論文の構成 第1章 自主的自立的な価値観形成をめざす社会科授業構成の原理 第1節 社会科授業における市民的資質の育成 第2節 合意形成を目指す社会科授業論の分析 第3節 個人の価値観形成を目指す社会科授業論の分析 第2章 子どもの価値観形成の論理 第1節 民主的価値の制度化の過程 第2節 子どもの価値観形成と吟味の過程 第3節 子どもの認知の発達の特性と学習対象 第3章 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科の内容編成の原理 第1節 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科の射程 第2節 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科内容編成 第3節 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科授業内容開発 第4節 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科授業の構成原理 第4章 「人・もの・こと」を空間的に比較・分析する授業 第1節 事実判断を相対化する授業—第3学年単元「わたしたちの町三隅」 第2節 事実判断を調整する授業—第3学年単元「私たちの生活と商店」 第3節 価値を相対化する授業—第3学年単元「昔の道具と今の道具」 第4節 規範を調整する授業—第4学年単元「水はどこから」 第5節 「人・もの・こと」を空間的に比較・分析する授業における自主的自立的な価値	

## 観形成の原理

### 第5章 制度・政策・法・社会的判断を空間的に比較・分析する授業

第1節 価値判断を相対化する授業—第4学年単元「芋代官 井戸平左衛門は正しかったのか」—

第2節 価値判断を調整する授業—第5学年単元「日本の農業を考える」—

第3節 制度・政策・法・社会的判断を空間的に比較・分析する授業における自主的自立的な価値観形成の原理

### 第6章 制度・政策・法・社会的判断を時間的に比較・分析する授業—第5学年「水俣病から考える」—

第1節 授業構成原理

第2節 第5学年「水俣病から考える」の単元開発

第3節 授業実践の概要

第4節 単元「水俣病から考える」における自主的自立的な価値観形成の原理

### 第7章 人・もの・ことを時間的に比較・分析する授業—第6学年単元「開かれた石見銀山」—

第1節 問題の所在

第2節 内容編成の論理

第3節 授業構成原理

第4節 第6学年単元「開かれた石見銀山」の開発

第5節 単元「開かれた石見銀山」における自主的自立的な価値観形成の原理

### 終章 自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科内容編成の原理

また、学位論文の概要は以下の通りである。

序章では、本研究の意義と方法について述べている。本研究は、小学校社会科において事実認識をふまえて子どもの価値観形成にまで関わる授業を開発し、それらを体系的に配置することによって、地域から国家へと学習の対象を広げていく従来の小学校社会科のカリキュラムに代わる教育内容編成原理と、授業構成を提案しようとするものである。この目的のために、本研究では、まず、これまで開発されてきた価値観形成に関わる授業論の目標、内容、方法を整理した。そのうえで、児童の認知的発達段階を踏まえ、自主的自立的な価値観形成を目指した小学校社会科の内容編成原理及び授業構成原理を、具体的な授業開発を通して明らかにしていった。

第1章では、これまで論じられてきた子どもの価値観形成をめざした社会科授業構成原理について分析・検討を行った。特に、合意形成をめざす社会科授業と個人の価値観形成をめざす社会科授業構成論を取り上げて、それらの目的と方法を吟味し、自主的自立的な価値観形成という視点から特質と課題を明らかにしている。分析の結果、空間的に異なる価値の比較・分析に取り組みせる授業と、時間的に価値の成立過程を分析させる授業があることが明らかになった。本章の結論として、この価値を比較・分析する授業と価値の成立過程を分析する授業は相互に補完的な関係にあり、児童の発達段階に応じて効果的に配置することで、自主的自立的な価値観形成を保障することができることを論じた。

第2章では、子どもの価値観形成の論理を、法学や社会学などの専門社会諸科学や心理学の成果をふまえて明らかにした。子どもは、家庭、近隣社会、学校、マスメディアなど様々な社会集団や組織と関わり、その活動に参画することで、社会化され、特定の見方や考え方を形成していく。子どもがこのような社会的な存在であることを前提として、まず、民主的価値の解釈、吟味・調整による社会的価値の創出、社会的価値の制度化、行動様式の規定という社会的価値の制度化の過程が、子どもの価値観形成に大きく関わっていることを論じた。そのうえで、現在の社会的価値を創出する契機となった過去の社会的論争問題を分析・吟味することによって、社会制度や社会システムの成立基盤である社会的価値は、人々の判断や選択によって成立したものであるということや、社会的価値は絶対的、自明的なものではなく、社会状況や自由や平等といった民主的価値の解釈によって絶えず、吟味・調整されうるものであることなどを認識させ得ると論じた。

第3章では、自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科授業は、分析対象としては「人・もの・こと」と「制度・政策・法・社会的判断」が、分析方法としては空間的比較と時間的比較が

想定され、それに基づいて内容編成ができることを論じた。具体的には、「人・もの・こと」を空間的に比較・分析する授業、制度・政策・法・社会的判断を空間的に比較・分析する授業、「人・もの・こと」を時間的に比較・分析する授業、制度・政策・法・社会的判断を時間的に比較・分析する授業の4類型が考えられることを明らかにした。

第4章では、「人・もの・こと」を空間的に比較・分析する授業の構成原理を、開発した授業の計画と実践の成果を示しながら具体的に論じた。事実判断を相対化する授業としては第3学年の単元「わたしたちの町三隅」を、事実判断を調整する授業としては第3学年の単元「わたしたちの生活と商店」を、価値を相対化する授業としては第3学年の単元「昔の道具と今の道具」を、規範を調整する授業としては第4学年の単元「水はどこから」を開発し、授業構成の特質を論じた。特質としては次の4点を挙げることができる。第1は、子どもにとって身近な、そのために自明視されている「人・もの・こと」の教材としての有効性である。第2は、身近な「人・もの・こと」を比較・分析することで、社会的事象に対する多様な認識を保障できることである。第3は、この学習を通して、社会的事象の背後にある事実判断を相対化できることである。そして、第4は、この学習は、事実判断と規範を批判的に吟味し、再構成させ得ることである。

第5章では、制度・政策・法・社会的判断を空間的に比較・分析する授業の構成原理を、開発した授業の計画と実践の成果を示しながら具体的に論じた。価値判断を相対化する授業としては第4学年の単元「芋代官 井戸平左衛門は正しかったのか」を、価値判断を調整する授業としては第5学年の単元「日本の農業を考える」を開発し、授業構成の特質を論じた。特質としては、第1は、多様な社会的判断や評価、政策を比較、分析することで、それらの背後にある価値判断を相対化することを目指す点である。第2は、社会的判断や政策、評価の批判的吟味を通して、その背後にある価値判断を調整し再構成することを目指す点である。

第6章では、制度・政策・法・社会的判断を時間的に比較・分析する授業の構成原理を、開発した第5学年の単元「水俣病から考える」の授業計画と実践の成果を示しながら論じ、その特質を明らかにした。特質の第1は、社会的論争問題の分析を通して、社会的判断の葛藤・調整過程を認識させることを目指す点である。第2は、社会の基盤となる多様な価値判断の対立を視点に過去を読み解くことにより、自己の価値判断基準を再構成し、状況に応じた、より現実的な価値判断ができるようになることを目指す点である。

第7章では、「人・もの・こと」を時間的に比較・分析する授業の構成原理を、第6学年の単元「開かれた石見銀山」の授業計画と実践の成果を示しながら論じ、その特質を明らかにした。特質の第1は、「もの」に対する意味づけや価値が、社会的に吟味、調整され変遷する過程をとらえさせることで、「もの」の価値を相対的にとらえることを目指す点である。第2は、現代の社会問題を「もの」の価値の違いという点から分析、吟味することで、自己の価値判断基準を再構成することを目指す点である。

終章では、自主的自立的な価値観形成をめざす小学校社会科内容編成の原理を明らかにした。それは、次の3点である。第1は、小学校社会科における自主的自立的な価値観形成の具体的な目標としては、多様な見方や考え方の認識、多様な選択基準、および評価基準の認識が想定され、これらを段階的に積み上げていくように内容が編成されるということである。第2は、見方や考え方、評価基準及び選択基準に対する認識は、多様性の理解から、分析を通じた自己の判断基準の再構成、具体的状況に応じた調整と判断というように発展していくことである。第3は、小学校社会科における自主的自立的価値観形成の最終的な到達点は、状況に応じた現実的、具体的な価値判断ができる資質の育成となることである。

## 2. 審査経過

本研究は、小学校社会科の目標の射程を事実認識だけではなく価値観形成にまで広げることで、小学校社会科の内容編成や授業構成を改善しようとしたものである。これは、従来、主に中等教育段階で提案されてきた価値観形成に関わる社会科授業構成論を初等教育段階に応用しただけではなく、価値観形成を中心に社会科授業のあり方を見直すことで、事実認識と価値認識を分けることで事実認識形成のみにとどまりがちであった小学校社会科において、事象や出来事の背後にある価値を捉えさせる授業のあり方を提案しようとしたものである。本研究の独自性は、上記のような子ど

も自身の価値観を見直させる授業構成と、そのような授業を展開するための内容編成を提案したところにある。

公聴会に続いて行った審査委員会では、研究の目的や方法から、論文の構成にいたる以下のような質問がなされた。研究の目的に関しては、内容編成研究としては、より具体的に教育内容の提案をする必要があったのではないかと、という質問があった。また、同様の質問としては、学習指導要領に示されたカリキュラムに代わる独自のカリキュラムの提案をすべきではないかというものもあった。これらについては、学習指導要領が拘束力を持つ現状において、学習指導要領に代わるカリキュラムを提案しても教育現場の改善にはつながり難いこと、それよりも、学習指導要領の内容を教師が地域、学校、子どもの実態に合わせて読み替えることができる内容編成の原理の提案の方が、個々の教師の授業改善に資すると判断したことなどが回答として説明された。

研究の方法に関しては、自主的自立的価値観形成という授業構成論の一般性や汎用性をいかに保障するかという点について質問があった。これは、すなわち、提案されている授業構成原理が紙田自身の経験や身につけた技能に基づくものではなく、他のどのような教師の授業改善にも寄与し得るものであることをいかにして保障しているかということである。この質問に対しては、単なる授業構成の提案にとどまらず、構想した授業を実践し、その成果の分析・検討をふまえた授業成立のための諸条件の一般化と具体的な提案を研究成果として示すことで、その汎用性を保障しようとしたという説明がなされた。

研究の内容に関しては、初等社会科に関する先行研究として取り上げているものが限定的であり、もう少し幅広く検討する必要があったのではないかと意見や、そもそも初等教育段階で価値観形成にまで踏み込む必要があるのか、提案されている授業それ自体も、その大半は事実の追究であり価値観形成を目指した授業として評価し得るのかといった厳しい指摘があった。これらに対しては、価値観形成とはいえ、価値の追究自体は事実の背後にある価値の明確化が前提となるため事実の追究が重要であること、また、そのような価値を捉えさせなければ、解釈された事実を絶対視し多様な見方や考え方の形成が困難となることが回答として説明された。

また、研究内容についての質問は、児童の評価の問題にまで及び、自主的自立的な価値観形成がなされた状態とはどのようなものであって、それをいかに評価していくかという質問がなされた。この点については、授業の前後に書かせたワークシートなどから子どもの価値判断の変容を読みとり、他者の考えをふまえてより多面的多角的な考察に基づく決定がなされているかどうかという点をみとっていくという説明がなされた。

以上のように、紙田は審査員からの質問に対して的確かつ丁寧に回答した。審査員からは、説明や論証の仕方にやや曖昧さはあるものの、事実認識中心であった小学校社会科において価値観形成のあり方を明らかにした点と、それについて8種類に及ぶ授業プランと実践を通して具体的に論証した点は、教育現場における授業改善に大いに寄与し得るものであるとの高い評価を得た。

### 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 紙田路子 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。